

成長に焦点、市民社会の担い手を育もう



川中 大輔さん
シチズンシップ共育企画代表・龍谷大学社会学部准教授

市民団体が高校と連携・協働すると
き、「子ども・若者に、この社会問題
に関心を持ってほしい」「自分たちの
活動に参加してほしい」という思いか
ら関わり始めることが多いでしょう。

しかし、学校教員の思いは少し違
います。社会への関わり方を生徒自身で
決めてほしいと思っていて、参加につ
いてニュートラルな立場です。生徒が

「こうしたい」と思ったときに必要な
知識や情報、スキルや方法などを得ら
れるようになることが教育の責任であ
ると考えます。その経験教育の場とし
て市民団体を捉えています。ある種の
「同床異夢」とも言えます（笑）。

この状態で同じ夢を見るためには、
「体験を通じて子ども・若者にどう成
長してほしいのか」を考えることが大
事です。そこから見いだされる学習の
到達目標を学校教員とすり合わせられ
ば、立場や背景が違つても目的を共有
できます。

● 課題を発見する探究学習

高校から生徒の活動の受け入れを依
頼されたときに、「どんな体験をして
もらうか」に市民団体の関心が向きが
ちなことは、気になるところです。

小・中学校であれば、それでもいい
かもしれません。小・中学校の「総合

的な学習の時間」は、課題解決を通して自らの生き方を見出していく学習だと文部科学省は説明しているからです。課題は与えられたものでいいし、答えがあつてもいい。いろいろな体験をして、その中から自分が社会とどう関わり、どんなふうに生きていくのかを考えられればよいのです。

一方、今回的新たな学習指導要領で高校に導入された「総合的な探究の時間」は、目的が異なります。小・中学校での学習を通じて見いだした自らの生き方に照らして、社会にどんな課題があるのか考えることが求められます。自分の生き方・あり方と切り離せない課題を発見して、解決する力をつけるものです。

ですから、市民活動の現場を知つてもらつたり、活動してもらつたりするだけでは不十分でしよう。そのうえで「あなたにとつての関心はどこで、ど
んなことを課題として発見したか。自分
の生き方とも結び付けながら、どの
ようによく解決していくのか」を問いかけ
ていかねばなりません。それぞれに課
題を立てて取り組んでもらうところ
に、本来は重点があるのであります。そのた
めには、体験後の「ふりかえり」にもつ
と関わつてもいいでしょう。ふりかえ

りは学校教員の役割と思われがちです
が、現場で一緒に活動した姿を知つて
いるからこそできる対話やフィード
バックがあるはずです。そこから課題
設定を促せるのではないでしようか。

● 态度をさせない

問い合わせるときに気をつけたいの
は、大人への「忖度」です。

地域の課題や魅力について考える高
校生向けのワークショップをすると、
語られる言葉に根がないと思われるこ
とがあります。例えば「子どもの貧困
に対する支援をしたい」と言つていて
も、当事者や支援者と話したことにな
く、話を聞き進めて何が彼女ら・彼
らの問題意識を生み出したのかが見え
ないことがあります。それは多分、大
人の側にある地域での活動イメージを
子どもが察知して「こんなことを言え
ば〇〇なんだろう」と表現しているん
だと思います。

子どもが付度してくれると大人は対
応しやすくてある意味で楽ですが、そ
れでは主体性は育ちません。言われた
ことをするだけや、誰かの顔色を見て
同調してばかりでは、いつまでも自分
の人生の主役になれません。子どもの
権利の視点からいっても、意見を表明
する以前に押し殺させていることにな

ります。

活動現場の人間は学校教員とは異な
り、付度されにくい第三者の立場を
持っています。ですから「なんで興味
を持ったの?」「本当にやりたいの?」
というまっすぐな問い合わせが届きやす
いはずです。搖さぶりをかけて本音に
近いことが出てきたら、現場の中で合
う活動に結びつけたり、地域の別の団
体につないだりすることもできるで
しょう。

● 一緒に市民社会を耕そう

教育分野以外のテーマに取り組む団
体は、子ども・若者の成長のために活
動しているわけではないですね。しか
し、市民社会を耕す——子ども・若者
教育の責務をどの団体も負っていると
私は考えています。そこをみんなが放
棄すると、市民社会の担い手はいなく
なってしまうかもしれません。

高校生世代の子ども・若者と関わつ
ていて一番手ごたえを感じるのは、「子
ども・若者の成長」です。そのやりが
いを励みとして、市民活動に携わる私
たちが、主体性を核にする市民社会の
構成員を育んでいきたいですね。

インタビュー・執筆

編集委員 百瀬 真友美

